

試行・検証等のテーマ

課題を抱える子供たちを対象とした体験活動

背景 ・ 課題

文部科学省が公表した「問題行動・不登校調査」で、全国の小中学校で2021年度に学校を30日以上欠席した不登校の児童生徒は前年度から4万8,813人(24.9%)増の24万4,940人となり、過去最多を記録した。不登校の増加は9年連続で、10年前と比較すると小学生は3.6倍、中学生は1.7倍増である。熊本県内においても、国公立小中高校で不登校となっている児童生徒が2021年度は4,729人に上り、過去最多を記録している。

事業の ねらい

自然体験活動といった野外教育の中で、自尊心を失ってしまった不登校児童・生徒の自己肯定感を取り戻し、自己効力感を育んでいく。また、非日常だけに安全地帯があるのではなく、体験学習サイクルの中で、様々なことを概念化し、日常の中でも安全地帯を見出すことのできる生きる力を互いに育み合っていく。

事業内容

<実施にかかる体制>

委員長:伊藤真太郎

委員:堤雄一郎 下田大雅 津留乃彩 竹尾光平 藤澤凜 河谷航 野尻有紗 井手和也

連携団体:向陽台病院(依頼中)

岩永 靖 九州ルーテル学院大学人文学部 心理臨床学科 准教授

高野美雪 九州ルーテル学院大学人文学部 心理臨床学科 准教授

<活動の内容>

○実施期間:2023年8月21日(月)~25日(金)

○実施場所:YMCA阿蘇キャンプ / 熊本YMCA東部センター

○参加者属性:メンバー:人15人 引率:9人

○具体的なプログラム内容

川遊び、ウォータースライダー、キャンプファイヤー、野外炊事、トレッキング、カヌー等



成果

自然体験活動が不登校児童・生徒の成長に及ぼす影響について、活動を通して試行した。雷雨により1日宿泊は減ってしまったが、「自分の経験は自分以外の人の、未来の財産に」することができるものとなった。様々ないきさつにより、学校へ行くことが困難な子どもたちであっても、場としての居場所と、心の安全地帯をしっかりと構築したうえで生活を共同しなくてはうまくいかない「場」をデザインすることで、人と人の接点を自然と自ら生み出し、その中で自分から自分たちと世界観を広げ豊かに育ち合う事ができていた。今後は、この成果がこのような特別な非日常や空間だけではなく、自分(拉致)の生活の日常でも生み出すことができるようになるために、どのようなステップを踏んでいく事が必要かを検証する必要がある。また、私たちが子どもたちと関わるうえで根底にある教育思想に「ほめ育」というメソッドを取り入れた。生まれながらに人はみな素晴らしい何かを持っていて、ほめられるために存在しているといった考えをキャンプの中でもつとめて、できないことではなく、それぞれのいい所を自然と見つけ、互いにそれを認め輝く関係を作ることができた。このように、課題ではなく、過程の中にある成長とつながりを大切にすることで、自然と一人ひとりが輝くことのできる場面を多く生み出すことができた。自己肯定感を育むことに留まることなく、自己肯定感へとステップアップできたのは、この「ほめ育」のメソッドが大きな効果を生んでいたと感じた。

今後の 展開

日常の中で、子どもたちの居場所や、心の安全地帯を確保し、自ら育ち、互いに育ち合う事ができる「場」をデザインする必要がある。そのため日常を長期キャンプと捉え、体験学習サイクルを回し、「ほめ育」メソッドを基本とした居場所メインとしたプログラムを展開していく。また、その中で、実際にデイキャンプや宿泊キャンプを実施していき、日常の中で取り戻した自己肯定感と、育んできた自己肯定感を開放する機会も生み出していく。また、学校教育や家庭。そして地域と協働共有することで、子どもたちの育つ場をどんな場面でも守っていく。